

発生的現象学における自然数の考察とその構成 (2)

—自然主義的な学問の根源についての試論—

武藤 伸司

0. はじめに¹

本稿は、「発生的現象学における自然数の考察とその構成 (1)」に続く論考である。前論考では、「[数]とは何であり、どのようにして構成され、認識されるのか」という問題を、発生的な意識構成のプロセスを通じて考察した²。そこで我々は、「数える」という意識作用において含蓄的に働いている時間意識の能作と、それに伴って、数える対象(内容)を構成する受動的綜合について確認した。そしてまた、自然数の連続の証明に用いられる数学的帰納法という思考がそもそも可能となるには、時間意識の能作、特に未来予持と、それによって開かれる未来地平が関係しているということを考察した。

しかしながら、前論考では考察しなければならない問題が残っていた。それは、「1」と「0」という、数学において基本となる数が、如何にして意識構成されるのか、という問題である。自然数の開始点である「1」、そして自然数とは異なる存在としての「0」という、数学の体系に必要なこれらの数は、如何にして意識の対象となるのか。またその他にも、連続的な自然数を定義するための数学的帰納法という公理が、未来予持的な意識構成を基盤にして可能になるとすれば、そうした「数え上げられ得る」という意味での無際限な無限と、基数において捉えられる実数の無限(実無限)の区別を、どのようにして意識は定立するのか、ということも問題として残っている。

以上のように、残された問題を解明すべく、我々はこの論考の歩みを進めたいのだが、その前にまず、考察すべき要点がある。それは、知覚とは異なる理念的な数という対象性をどのようにして意識が獲得するのか、という問題である。つまり、現象学の重要な方法論の一つである本質直観の問題である。我々は、本稿において、この点を重点的に考察したい。

したがって、本稿は、以下のことを考察する。まず、1. 前論考において考察した受動的綜合における集合的な結合の議論を再確認する。そして、2. 数という理念的な対象を本質直観するプロセスを考察する。本稿の主題は差し当たりここまでであり、上で述べた「1」と「0」という数の対象化を、志向性の充実と空虚という事態から考察すること、無際限としての無限と、実無限についての現象学的な解明を試ることは、今回は課題として残ったままとなる。しかし、本稿で確認する本質直観のプロセスの議論は、「1と0という数の発生プロセス」を呈示する可能性を指摘する重要な準備となる。それによって、前回と今回の論考を通じて、自然主義的な思考の前提である「数」という道具立ては、我々の生活世界を基盤として発生してきたものであるということが、さらに明確になると考えられ得る。そうならば当然、自然科学に対する我々の通念は、根本から変更を迫られ、科学技術自体の通念を再考する必要性も促すことになるだろう。

1. 集合的な結合の受動的綜合から数の本質直観へ

フッサールは、集合や基数という概念が数学の正当な対象であり、かつ、それらの対象性が意識において如何にして構成されるのかを考察している。その構成は、「集合的な結合」という心的な作用によって産出されると、

フッサールは『算術の哲学』（以下、『算哲』と略記する）で述べている（vgl. XVII, S. 90f.）。そこで前論考において我々は、この集合的な結合に対してさらに考察を加えた。それによって我々は、意識が集合の要素となる個々の対象を構成すると同時に、それらを全体の集合へと結合するように構成しているということを指摘した。そのことから我々は、そうした構成が含蓄的に作動している受動的な内的時間意識の諸能作によって成されており、また同時に、要素の集合を連合によってノエマ的なものとして先構成する受動的綜合が生じていることを確認した³。またその他にも我々は、自然数を定義するペアノの公理について、その中でも重要な公理の一つである数学的帰納法が、そもそも連続という意識を可能にする未来予持ないし未来地平に関係しているという点も考察した⁴。したがって、集合的な結合とは、それが意識の原初的な場面において構成されているということから、序数的に「数える」という能動的な作用に先立って構成されており、また、抽象的かつ理念的な基数という数学的に規定された数多性を基づけていると主張し得るのである。こうして、集合の要素が基数として序数より根本的であると数学において考えられ得るのは、実数の連続性（濃度）に関する理論的な説明によるものだけではなく、意識の本来的な構成能作にも由来していると考えられ得るだろう。

以上のように、自我による能動的な高次の理論構築（推論や証明などの論理的な思考）や、数学や論理学などの理念的な対象は、意識の構造上、受動的綜合や時間意識の能作に下支えされていると、現象学的な分析において明確に呈示される。しかしながら、そうした数の理念的な対象性の獲得という事態が如何にして成されるのか、という点は、前論考において述べられていなかった。フッサールが『イデーニ I』において注意しているように、「数」ということの本質ないし理念は、その都度の意識に現出する数の表象とは異なる対象性を持っている（vgl. HuaIII, §22）。このフッサールの注意に即して、我々は、数がまさに理念というレベルの対象であることを捉える意識の働きを明らかにする必要がある。そこで確認されねばならないことが、まさに理念を看取するところの働きである本質直観なのである。我々は、この本質直観の内実を考察し、理念的な数を直観するプロセスを呈示することで、次の議論への準備とする。

2. 本質直観のプロセス

a) 本質直観について

周知の通り、フッサールは、「学問」の本質的な特性について、経験に由来する蓋然的な因果法則を立てる「事実学」（vgl. HuaIII, §2）と、その事実学における諸対象の本質を直観し、それらの必然的な連関を見出す「本質学」（vgl. HuaIII, §7）を区別する。当然ながら、数学や論理学は後者に属する（ebd.）⁵。しかしながら、本質や理念は、如何にして意識に与えられるのか。一般的にそれらは普遍的なものとして理解されるが、しかしそうした経験から離れた純粋な、形相的な本質というものは、志向的な体験において構成された対象とどのように関係するのか。例えば、本質や理念というものは、経験を抽象化すること⁶によって一般性なり普遍性なりを獲得するのだとしてみよう。だが、経験が本質を獲得することの契機になるとするならば、その経験の事実性や偶然性がその本質の中に含みこまれてしまい、その時点で、本質や理念は蓋然的なものに留まり、それがアイデアや形相といった、アプリアリな特質を持つとは理解されなくなってしまうのではないか。このように、構成された経験から本質の直観へ、という、いわゆる「木から鉄を作る」かのような事態を、我々はどのように理解すればよいのか。

以上のような問題について、フッサールによる本質直観の分析を確認しよう。フッサールは、『経験と判断』において、「I. 変更の多様性を産出しつつ通覧すること、II. 絶え間ない合致において統一的に結合すること、III. 差異に抗して合同になりつつあるものをはっきりと見遣りながら（herausschauende）能動的に同一化すること」（EU, S. 419）という三つの段階を、本質直観を得るプロセスとして述べている。またこのことについて、フッサールは、『イデーニ I』においてもすでに、一般的な本質が「個的な音から（個別に、あるいはほかの音との比較を通じて「共通のもの」として）はっきりと眺めやることのできる（herauszuschauende）契機として純粋に理解される」（HuaIII, S. 13）と述べている。つまり、意識が本質直観へ至るプロセスとは、1. 個的な諸対象を得る、2. それらの比較、3. 共通項の成立、4. その共通項の直観、という流れを持っている。しかしながら、本質直観を獲得するプロセスの開始点が経験的な対象構成である以上、それらを比較して共通項を抜き出しても（抽象）、

結局は上で述べたような疑問を回避できないように思える。そこで、このプロセスには、本質直観へ至るために事実性や偶然性を遮断する方法が必要となる。このことに関して、我々は、1. から2. へ、そして2. から3. への移行の「仕方」に注目する。以下において我々は、それらの移行の仕方の特徴を、『経験と判断』で示された三段階のプロセスから考察する。

b) 個体の対象構成から比較対照へ—自由変更について

順を追って、1. 「個体の対象構成」から2. 「比較」への移行から考察しよう。フッサールに即して言えば、個的な諸対象を得てそれらを比較する際に、三段階の内の一段階目にある「変更の多様性を産出する」ということが求められる。このことは、「経験された、あるいは想像された対象性を、指導的な「範例 (Vorbildes)」の性格、諸変項 (Varianten) の無限に開かれた多様性の産出にとっての出発点という性格を同時に保持しているといった、任意の例へと転換すること、つまり、変更 (Variation) に依拠している」(EU, S. 410f.) と、フッサールは述べる。これはつまり、我々がある経験的な対象を範例と看做して、それを基に、想像における変形といった、様々な変更を任意に行うということである。フッサールは、この範例の任意の変更によって、想像的な対象が「事実的な現実性」(EU, S. 423)、「事実的な現存在」(EU, S. 425) とは無関係になり、偶然性の性格から解放されると考えている (vgl. EU, § 89)。では、なぜ任意性と、その際の想像による多様な変更が、出発点である経験的、事実的な対象を形相的な本質へと導く契機になり得るのか。

まず、一つ目の要件に、「想像」の作用が挙げられる。フッサールは、「想像には終わりがなく、新たに規定することという意味での自由な整形 (Ausgestaltung) にかかれたままになっている」(EU, S. 202f.) と述べている⁷。つまり、想像の働きが範例のバリエーションを自由に立てることによって、範例を「可能的なもの」にする、すなわち可能性を開くことになる。そして二つ目の要件が想像的な変更における「任意性」である。これについてフッサールは、「あらゆる変更の多様性には、「任意に以下同様 (und so weiter nach Belieben)」という顕著な、そして極めて重要な意識が本質的に属している。それを通じてこそ、我々が「無限に開かれた」多様性と呼ぶところのものが与えられる」(EU, S. 413) と述べている。つまり、一つ目の要件である想像の働きから、我々は、自由な可能性にかかれたまま、範例の様々な変項を産出し、そしてそれらを、二つ目の要件である任意性によって、これもまた自由に、思う通りに幾つも産出するのである。すると、そのように幾つも産出された様々な変項の間に、内容的な類似性や差異性が生じることになる。これらの内容的な類似と差異から比較が可能となる。これについてフッサールは、そもそも一般的なものが意識されることの基礎に、同等なもの (das Gleich) 同士の連合的な総合があると述べている (vgl. EU, § 81)。特に、「我々が模範と名づけた主導を与える出発点の例から、常に新たな模造 (Nachbildes) への移行が、前もって横たわっている … 模造から模造へ、類似のものから類似のものへの移行の際に、個々の任意のものは全て、それらが出現することの連続の中で重層的な合致へと至り、そして、純粹に受動的に、総合的な統一へ進む … すなわち、同一のものは同一のものとして受動的に先構成され、そして形相の看取は、そのように先構成されたものの能動的に見つつある把捉に基づく」(EU, S. 413f.) ということから、受動的総合に即して先構成的に比較が生じていると述べていることに注目する必要がある⁸。こうした類似性や類縁性の連合と差異性の抗争による比較対照の中で、やがて諸変項が「任意に以下同様」というかたちで意識されるようになる。

この任意に以下同様と言うことについて、注意すべき点がある。それは、「形相が、自由で任意にどこまでも産出可能な、合致 (Deckung) へと至りつつある変項の多様性に関係づけられているということ、開かれた無際限性に関係づけられているということ、これらのことは、無限性へと現実に進行していくことが必要であろうということ、全ての変更の実際の産出が必要であろうということの意味しない … むしろ、変項形成のプロセスとしての変更それ自体が、任意性の形態を持つこと、変更の任意の継続的な形成 (Fortbildung) という意識において、プロセスが遂行されるということが重要である」(EU, S. 412f.) ということである。ここでフッサールが述べているように、本質を見出すために遂行される自由変更の任意性は、全ての可能な変項を必要としているのではないのである。以上のような意識の構成プロセスによって、我々は新たな変項の追加は幾つも遂行できるのだが、我々の実際の体験において、可能な変項を無限に遂行し尽くすことは不可能である。しかし、「任意に以下同様」という継

続の見通しは、未来予持という不充実な志向によって形成される未来地平に関係していると考えられる⁹。自由変更を繰り返すことによって、その働きと内容の傾向性が未来地平として形成されれば、不充実で未規定的ではあるが、しかしそれがまさに可能性として意識され、全てを完全に枚挙する必要はなくなると考えられ得るのである。以上のことから、多様な変更とは、経験的な対象を想像の働きと任意性によって、無限に開かれた「純粋な可能性」(EU, S. 426)を持つ想像的な対象へと変転することであると理解される。当初の経験的な対象が想像の中で純粋な可能性を持つことは、出発点とした個的な対象から事実性や偶然性を欠落させることになる(それゆえ、本質直観へ至るための自由変更という手続きは、想像的な対象から始めても構わないのである(vgl. HuaIII, §4)¹⁰。こうした一段階目の方法によって、本質それ自体を得るための入り口が開かれることになる。

c) 比較対照から共通項の成立という事態へ—理念化について

次に、2.「比較」から3.「共通項の成立」への移行を考察する。一段階目の「変更の多様性を産出する」ことによって、すでに二段階目の「絶え間ない合致において統一的に結合すること」、すなわち「共通項の成立」への足掛かりが準備されている。以上のような想像による任意の、自由な変更によって、経験や事実から離れ、次々に新たな類似する像を無限に獲得し得るということが確認されたが、例えば、様々な模様の猫、様々な色の犬など、そうした様々な変更を想像の中で行うことで、変更を被らないもの、あるいはその点を変更してしまうと、もはや類似性を維持できない、何らかの共通項が見出されるようになる。これについてフッサールは、「この模造の多様性のある統一が貫いていること、ある原像(Urbild)の、例えば事物の、そういった自由変更の際に、必然性の中で、ある不変項が必然的な一般形式として保持されたままであること、それらのこと無しには、その事物がその不変項の種(Art)の例となるというようなことは、そもそも考えられ得ないであろうということが、明らかになる」(EU, S. 411)と指摘する。つまり、ある何らかの原像ないし範例に対して自由変更を重ねれば重ねるほど、どのように展開していてもその限界を指示するような、その都度の変項の差異とは無関係な内容として、不変の項が逆に浮かび上がってくるのである¹¹。したがって、ここで際立ってくる共通項は、変更の限界、すなわち諸々の想像が不変の項へと収斂した結果であると考えられ得る。フッサールは、この不変項こそが「一般本質(ein allmeines Wesen)」(ebd.)であり、形相ないしイデアであると考えてるのである。

このことには、まさに時間意識の能作が関わっている。フッサールは、「当然ながら、多様性がそれぞれのものとして、数多性として意識されて、そして手放されないでいるということ、前提として必要とする。そうでなければ、我々は、共通する一者として存在する形相を、イデア的に同一のものとして得ることはない」(EU, S. 414)と述べている。ある範例を任意に新たな形へと想像的に仮構する自由変更を次々に行う際に、そうした変項が「手放されないでいる」という前提がなければ、すなわち意識において掴まれて持続していなければ、次々に生じるものを重ね合わせることはできない。この重ね合わせという合致のためには、それ以前のものの過去把持が必須なのである。したがって、フッサールは、「我々がより以前の仮構物を開かれたプロセスにおける多様性として掴みつつ、合同であることや純粋に同一のものであると見やる場合にだけ、形相を獲得するのである」(ebd.)と主張するのである。

以上のように、二段階目における絶え間ない合致による統一的な結合とは、一段階目の変更の成果を、時間意識の能作と共に、形相的な一般本質と看做し得る共通項を浮かび上がらせることであると考えられ得る。したがって、一段階目において無限に拡張された可能性は、類似性における連合的な総合と時間意識によって、共通項という不変の、合同のもの、すなわちイデアないし形相として、ある一つの必然的な本質へと収斂していくのである。フッサールは、「我々は、こうした形態変化に富む精神活動性(diese vielgestaltige Geistestätigkeit)を理念視ないしは理念化とも呼ぶ」(HauIX, S. 76)と述べている。つまり、自由変更による変項の拡張と収斂のプロセスは、まさに範例の理念化と言い得るのである。

d) 共通項の成立から形相的な対象性の認識へ—同一化について

またさらに、フッサールは、「この多様性に(または、実際に直観へと進む変項と共に自ずと構成されつつある開かれた変更のプロセスという土台に)、形相としての一般的なものという本来的な看取は、高次の階層として組

み上げられている」(EU, S. 413)と述べている。この高次の階層が、三段階目における「能動的な同一化」であり、この作用によって最終的に共通項が形相ないし本質として直観されることになる。

では、同一化とはいかなる作用であるのか。フッサールは、「しかし我々が真の自体 (Selbst) や決定的に証明される表象について語る時、再想起を通じて瞬間的な意識を超えていき、その再想起の中でその同じ表象へと繰り返し立ち戻り、そしてその表象と同じく思念された対象に立ち戻る。そして他方では、その再想起において我々は、同一的で抹消不可能なものとして証明しつつある自体を繰り返し確認し得る」(HuaXI, S. 110)と述べている。また、「確かに、自体所与はある自体を根源的に構成しているのだが、しかしそれは、可能的な再想起の多様性によってのみ、自体なのであり、自我にとっての同一的なもの、または同一化可能なものなのである」(HuaXI, S. 203)とも述べている。つまり、同一性を確証し得るために再想起の繰り返しを必要とするということである。むしろこのことは、貫が言うように、「作用を反復できるがゆえに、対象は同一者として成立する」¹²ということである。再想起という準現在化が含蓄的な過去把持や未来予持に基づけられていることは言うまでもないことだが(過去把持と未来予持の相互的な移行のプロセスがあるからこそ、そもそも「繰り返す」と言うことが可能になる)、しかしその基底層における受動的綜合で先構成されている与件は、同等のものであっても同一のものではない(vgl. HuaXI)。感性的に、あるいは射映として与えられる体験は、その都度様相を変えることから、感性的な所与自体に同一性を求めることはできない。それは、類似や類縁といった同等性に留まる。確固とした同一性を持つ対象を顕在化させるには、そうした体験に即した同等性を(まさに超越的な対象として)超えて行く必要がある。つまり、広い意味で理念や形相と言った知覚的な対象とは異なる「対象性」を顕在化させるには、自我がその都度、先構成された与件を対象として措定し、それを確証ないし証明するという高次の思考を通り抜けることが必要なのである。そうすることで、自由変更によって浮かび上がった共通項が、「理念的に同一の対象性」を持つ本質として、直観にもたらされるのである。

したがって、ここでの直観は、知覚的な対象ではないと述べた通り、感性的な経験ではない。個物のもとにある個々の赤を直観するように、一般的な赤を直観するわけではないのである(vgl. EU, §88)。自由変更の作用を通り抜けている限りで、一般的な赤は、経験的な赤とは異なる対象性をすでに有しており、このことは数においても同様である。知覚的な対象として個々の対象を数え上げることと、その数え上げられた対象を集合的に数へもたらすことは、こうした本質直観のプロセスによるものであると、理解し得るのである。

以上のようにして、本質直観は、意識の基本的な構造、すなわち受動的綜合を前提とした能動的な諸作用によって成立するということが示された。経験的な対象を想像作用によって自由変更し、類似性に即した比較対照によって共通項を際立たせ、再想起によって能動的に同一化する。こうした本質直観のプロセスに即して、つまり、自由変更という理念化のプロセスによって、我々はその形相的な存在を獲得し、また数という認識においても、理念的な対象性として直観するのである(vgl. HuaIX, §9, c)。

3. おわりに

以上のようにして、数という理念的な存在は、本質直観へのプロセスと、その行為を下支えする含蓄的な時間意識能作と受動的綜合によって構成されていると言い得るのである。しかしながら、これで自然数に関する諸要件の全てを考察したわけではない。最初に述べたように(また前論考で述べたように)、1と0という数学において前提的な数が如何にして意識構成されるのかについての考察が為されていない。我々はこの考察を、志向性の充実と不充実の関係に即して、根源的な発生の場面を捉えることを試み、数学に対する発生的現象学の考察を深めていきたいのだが、この点は、またさらに今後の課題となる。

参考文献

〈Husserliana〉

- Bd. III: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Erstes Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie, hrsg. von W. Biemel, 1950. (邦訳: 『イデーニ』全2巻 (I-1, I-2) 渡辺二郎訳、みすず書房、1979、1984年)
- Bd. IX: *Phänomenologische Psychologie*. Vorlesungen Sommersemester 1925, hrsg. von W. Biemel, 1962.
- Bd. XI: *Analysen zur passiven Synthesis*. Aus Vorlesungs- und Forschungsmanuskripten (1918- 1926) , hrsg. von M. Fleischer, 1966. (邦訳: 『受動的総合の分析』山口一郎・田村京子訳、国文社、1997年)
- Bd. XII: *Philosophie der Arithmetik*. Mit ergänzenden Texten (1890- 1901) , hrsg. von L. Eley, 1970.
- Bd. XVII: *Formale und transzendente Logik*. Versuch einer Kritik der logischen Vernunft, hrsg. von P. Janssen, 1974. (邦訳: 『形式論理学と超越論的論理学』立松弘孝訳、みすず書房、2015年)
- Bd. XVIII: *Logische Untersuchungen*. Erster Band. Prolegomena zur reinen Logik, hrsg. von E. Heidegger, 1975. (邦訳: 『論理学研究』第1巻、立松弘孝訳、みすず書房、1968年)
- Bd. XIX/1: *Logische Untersuchungen*. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Erster Teil, hrsg von U. Panzer, 1984. (邦訳: 『論理学研究』第2巻、第3巻、立松弘孝・松井良和、赤松宏訳、みすず書房、1970年、1974年)
- Bd. XIX/2: *Logische Untersuchungen*. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Zweiter Teil, hrsg von U. Panzer, 1984. (邦訳: 『論理学研究』第4巻、立松弘孝訳、みすず書房、1976年)
- Bd. XXIII: *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung. Zur Phänomenologie der anschaulichen Vergegenwärtigungen*. Texte aus dem Nachlass (1898- 1925) , hrsg. von E. Marbach, 1980.
- Husserl, E., *Erfahrung und Urteil. Untersuchung zur Genealogie der Logik*, hrsg. von L. Landgrebe, Hamburg, Felix Meiner, PhB 280, 1972. (邦訳: 『経験と判断』長谷川宏訳、河出書房新社、1975年)

貫成人『経験の構造 フッサール現象学の新しい全体像』勁草書房、2003年

松田毅「フッサールのファンタジー—現象学的還元現象学の試み—」『哲学』第36号所収、日本哲学会編、1986年

武藤伸司 a 「発生的現象学における自然数の考察とその構成 (1) —自然主義の基礎づけに関する現象学的方法の一つとして—」東洋大学国際哲学研究センター編『国際哲学研究』第4号、2015年

武藤伸司 b 「現象学と自然科学の相補関係に関する一考察 (1)」『「エコ・フィロソフィ」研究』第9号、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ編、2015年

注

- 1 凡例: *Husserliana* (Den Haag, Kluwer Academic Publishers, 1950-) からの引用は巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字によって () 内に示し、原書による強調を強調、筆者による強調を強調とする。また、引用文に無い語句を補足する場合、[] 内に示す。そして『経験と判断』を EU. と表記する。
- 2 拙論、武藤伸司 a 「発生的現象学における自然数の考察とその構成 (1) —自然主義の基礎づけに関する現象学的方法の一つとして—」東洋大学国際哲学研究センター編『国際哲学研究』第4号、2015年、pp. 121- 130 参照。
- 3 拙論 [武藤 a (2015)]、pp. 121- 124 参照。
- 4 つまり、現象学的な意識分析において、受動的総合における先構成が自我を触発し、それを基にして能動的総合による対象構成へと至るというプロセスの本質規則性からすれば、そもそも、「数」という理念的な対象の直観も、内的時間意識や受動的総合が前提になっていると、考えられ得るのである。この点について、拙論 [武藤 a (2015)]、pp. 124- 127 参照。
- 5 また、『論理学研究』(以下、『論研』と略記する) 第1巻第72節 (HuaXVIII, § 72) も参照のこと。経験的な事実学の処理方法としての数学や論理学は「イデア的な規範」(HuaXVIII, S. 258) を持つ。経験的な諸科学の蓋然的な認識自体のイデア的な要素と諸法則に関わる限りで、純粋数学ないし純粋論理学は本質学の範疇である。
- 6 フッサールは『論研』において、「二つの誤解が普遍的な対象の教義の発展を支配してきた。一つ目は、普遍的なものの形而上学的な実体化、[すなわち] スペチエスの実在的な実存を思考の外に想定すること [である]。二つ目は、普遍的なものの心理学的な実体化、[すなわち] スペチエスの実在的な実存を思考の中に想定すること [である]」(HuaXIX/1, S. 127) と述べている。つまり、前者がプラトンの実念論であり、後者がロック以降のイギリス経験論的、近代の抽象理論である。本文の例では、後者の抽象理論の方を呈示している。フッサールは、両者ともに普遍的なものを実在と見做しているという点が誤解 (前者が事物とイデアとを分離してその実在を意識の外に認め、後者が経験的な実在の一般観念に回収して意

識の内には認めないこと)であると指摘して、それを「思考された対象」という、志向性の相関者と捉える。フッサールにとっての抽象とは、対象から実在的な内容を捨象することであり、純粹形式へと至ることである。我々は、志向性理論における実在措定という対象構成の観点から、「理念化的な抽象」を理解せねばならないのである。

- 7 フッサールは、さらに関連するところで、『像意識の現象学』において、「空想には、空想されたものに関連した現実性の意識が欠けている」(HuaXXIII, S. 4)と、述べている。想像のこうした反事実性とも言える性格が、かえって実在的な措定における拘束を解くと考えられる。この点について、松田は、「ファンタジーに含まれる反事実性は本質直観の重要な契機である自由変更にも見出せる」(松田毅「フッサールのファンタジー—現象学的還元の現象学の試み—」『哲学』第36号所収、日本哲学会編、1986年、p. 191参照)と述べている。
- 8 このことについて、拙論では、未来予持の能作と関係づけて、「受動的な構成の次元における未来予持の能作が、類似のものから類似のものへという連合の能作と一緒にあって、先構成的な移行プロセスを構成し、そこで同時に未来予持的な傾向として開かれる未来地平が、自由変更の土台として、前もって用意される」と考察した(武藤伸司b「現象学と自然科学の相補関係に関する一考察(1)」『「エコ・フィロソフィ」研究』第9号、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ編、2015年、p. 244参照)。
- 9 この点について、本文の注8と、拙論[武藤b(2015)]、pp. 243-244を参照のこと。
- 10 フッサールは、『形式的論理学と超越論的論理学』において、「変更は、経験的な変更としてではなく、純粹な想像の自由と、任意性の—「純粹に」—一般的なものの—純粹な意識において遂行される変更として理解されねばならない」(HuaXVII, S. 255)とも述べている。
- 11 この点について、『受動的総合の分析』における「第三部 連合」の第一章から第三章までを参照のこと。受動的総合における連合と触発の議論において、比較対照のための意識の能作が分析されている。特に、与件の同等性、同質性、類縁性から同一性が対象構成されるという発生的な構成のプロセスは、本論考の基調を成している考え方である。
- 12 貫成人『経験の構造 フッサール現象学の新しい全体像』勁草書房、2003年、13頁参照。